

比較検討した。対象は12症例で、乳頭状腺癌2例、濾胞状腺癌2例、混合型8例。転移部位はリンパ節2例、肺7例、骨3例であった。RIの集積はI-131 3 mCi シンチで6例、Tl-201 シンチで8例に認められた。Tl-201 シンチはI-131 3 mCi シンチより有用であるが骨転移に対する陽性率が33%と低く、骨シンチで補う必要がある。以上より初回ヨード内用療法施行時のRI検査としてI-131 3 mCi シンチ、Tl-201 シンチ、骨シンチの3者は省略できないという結果になった。

23. ¹³¹I-MIBGにて確診できた褐色細胞腫の一例

麻尾 尚子 横矢 仁 (国立大竹病院・内)
 中西 敏夫 佐々木正博 (広島大・放部)
 仙波 真弓 勝田 義知 (同・放科)

〔症例〕 33歳男性。生来健康だが、昭和61年3月10日頃より頭痛が出現。15日、嘔吐を伴う激しい頭痛を訴え、当院受診し、入院。

〔現症および経過〕 やせ体型。意識清明。顔色不良。多汗。四肢冷感。脈102/分。整。血圧240/148 mmHg。心拡大(-)。2L~心尖部に駆出性収縮期雑音(+)。腹部平坦。高血糖(+)。高脂血症(+)。血中CA増加(+)。尿中CA、VMA高値。腹部エコー図および腹部CTにて肝右葉に接して6cm×5cmの腫瘤(+)。¹³¹I-アドステロールにて右副腎のup-takeの低下(+)。¹³¹I-MIBGにて右副腎部に一致した明らかな集積像(+)。右副腎静脈造影にて腫瘍像(+)。部位別静脈血サンプリングにて右副腎静脈CA値増加(+)。以上より、右副腎原発の褐色細胞腫と診断し、摘出術施行にて、経過良好。

今回、¹³¹I-MIBGが褐色細胞腫の局在診断に特異的かつ非侵襲的方法として有効であったので報告した。

24. 临床上、non-functioning adrenal tumor と考えられた3例

大西 範生 広瀬千恵子 須井 修
 (徳島大・放)
 井口 博善 (健保鳴門病院・放)
 高麗 文晶 河野 吉宏
 (徳島県立中央病院・放)

non-functioning adrenal tumor は偶然に発見されることが多く、CTの普及に伴い、その頻度は増加して

るものと思われる。今回われわれは、臨床上 non-functioning adrenal tumor と考えられた3例を経験したので報告した。

副腎シンチグラフィーでは、全例腫瘍側のみ集積が認められたが、この機序は不明である。また、どのような転帰をとるのかについても明確な結果は得られていない。われわれが経過観察している2例は、腫瘍の大きさや臨床症状に変化は認められず、今後の検討が必要と考えられた。

25. ¹¹¹In 標識モノクローナル抗体の腫瘍集積性に関する基礎的検討

村中 明 福永 仁夫 小野志磨人
 古川 高子 大塚 信昭 森田 陸司

(川崎医大・核)

ヒト大腸癌に対する¹¹¹In 標識モノクローナル抗体(19-9,17-1A)を用い、培養細胞や組織切片へのin vitro binding と担癌ヌードマウスにおけるimagingを比較し、その腫瘍集積性の基礎的検討を行った。

Cell bindingの検討では、ヒト大腸癌由来の培養細胞(SW 948, SW 1417)に対する結合は5~20%/10⁶ cellsで特異的結合が認められた。コントロールとして行ったヒト子宮頸部癌由来のHeLa S3への結合は1%以下であった。SW 948細胞をヌードマウスに移植し、形成された腫瘍および正常組織を摘出し、組織切片に対する標識抗体の結合をin vitroで検討すると、腫瘍組織への結合は細胞への結合に比べて著明に減少したが、他の正常組織(肝、腎、筋肉、等)より3~12倍大であった。一方、SW 948担癌ヌードマウスのimagingでは、両抗体とも腫瘍部に集積しimaging可能であったが、肝や腎にも著明に集積し、in vitro bindingと差異が認められた。

26. ¹³¹I-lipiodolによる家兎VX₂移植肝癌の治療

稲月 伸一 木村 誠 (四国がんセ・放)
 森脇 昭介 (同・病理)
 湯本 泰弘 (同・内)
 村瀬 研也 安原 美文 浜本 研
 (愛媛大・放)

目的: VX₂移植肝癌に対する¹³¹I-lipiodolの抗腫瘍効果の検討。対象: 約2kg前後の雌性白色家兎30羽。方法: VX₂癌細胞を約5×10⁵個とし肝左葉内側区へ移